

さいたま
見沼

よみさんぽ

2021

Vol. 37

まち歩き 5

東武野田線を歩く；北大宮駅

東武北大宮駅
TOBU NORTH OMIYA STATION
裏参道口
URASANDOUGATE

水泳場
WIMMING POOL

野球場・サッカー場
BASEBALL STADIUM・SOCCER STADIUM
動物園
ZOO

記録写真家 柿内未央

東武野田線を歩く；北大宮駅

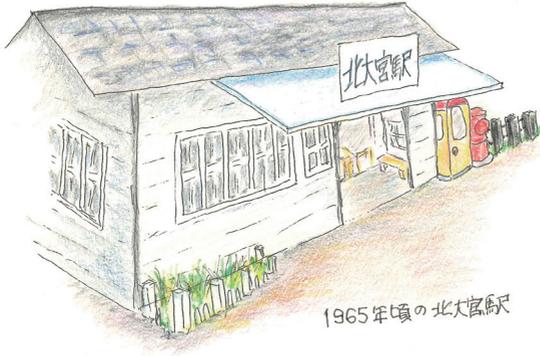
今年のまち歩きは、さいたま市内にある東武野田線の駅とその周辺です。2014（平成26）年から「アーバンパークライン」という愛称がつけましたが、古くからの利用者にとっては「やっぱり野田線」。というわけで、このシリーズでは、野田線という呼称を使わせていただきます。

野田線は大宮—船橋間を結ぶ鉄道です。始まりは1911（明治44）年、野田から柏へ醤油を運ぶために開業した千葉県営軽便鉄道でした。1923（大正12）年に払い下げを受けた北総鉄道が野田線として開業、その後路線を延伸していきます。1929（昭和4）年に総武鉄道と名称変更し、翌年には総武鉄道の野田線と船橋線で大宮と船橋の間がつながりました。営業成績は良好だったのですが、戦時下の鉄道統制により、1944（昭和19）年東武鉄道に合併されました。戦後に大宮—船橋間の全線を野田線と改称し、現在の東武野田線の形ができたのです。

私は1958（昭和33）年、大宮に越してきてから、ずっと東武野田線を利用しています。この路線、東武鉄道の中でもひととき地味な存在だと薄々気づいていましたが、何冊か鉄道関連の本を見ていたら、「他線で使用されていた旧型車が転用されるのが通例」、「とかく設備投資の遅れた田舎電車というイメージ」、「野田線は古い車両の寄せ集め」などと書かれているではありませんか。「やっぱり野田線！」と改めて納得しました。

私の最寄り駅は、大宮駅から1つ目の北大宮—地味な野田線の中でもひととき地味な駅です。通勤も通学も旅行も買い物も、子どもの頃から生活圏の外へ出るときは、まず北大宮から野田線に乗って大宮駅に行き、そこから目的地への電車に乗り換えました。北大宮の駅前にはもともと広場も商店街らしきものもありません。洋服を買ってもらうときなどは大宮駅周辺のお店に行くのですが、それを我が家では「町へ行く」と言っていました。たとえ1駅2分しか電車に乗らなくても特別なことだったのです。

北大宮駅の駅舎は、私が利用し始めた頃、木造平屋の小さな駅で、改札口



1965年頃の北大宮駅

からホームへ今は地下道になっていますが、当時は改札を入るとすぐ構内踏切があり、そこを渡ってホームへ行くようになっていました。遮断機の無いのどかな踏切でしたから、駅員さんは神経を使ったに違いありません。ホームは今よりずっと短くて、車両の台数が2

両から4両、6両と増えるたびに拡張されて長くなっていきました。

この頃、駅前にあったのはタバコ屋でした。税務署へ行く道の角です。タバコ屋はこの店に限らず、なぜかたいてい道の角にあったものです。1件も残っていませんが、覚えているだけでも、この周辺には角店のタバコ屋が5件ありました。今、駅前には駐輪場とカレー屋とその2階に喫茶店があります。駅舎が新しくなった時、上層階はマンションに、1階にスーパーマーケットができました。

駅前の道を南に向かって行くとすぐに中山道、そこから少し大宮方面に戻ると左に曲がる道があり、角に「かんべい官幣大社氷川神社」という碑があります。この道が氷川神社の裏参道です。北大宮駅から氷川神社と大宮公園は10分くらいで行けます。かつては大宮税務署、大宮警察署、法務局の最寄り駅でもあったのですが、警察署と法務局は移転してしまいました。鉄道博物館も徒歩で行けないわけではありませんが、15分くらいかかります。そもそもニューシャトルの鉄道博物館駅があるのですから、ここを最寄り駅というには無理があります。つまり住民以外の利用は少ない駅なのです。

1960年代、東武の大宮駅も今のようにJR（当時の国鉄）と別々ではなく、改札を通らずに乗り換えることができました。しかも1つのホームの片方が野田線、もう片方が国鉄の上り方面乗り場になっていたのも、野田線を降りた乗客が反対側の上り電車めがけて突進するという光景が、毎朝展開されたものです。

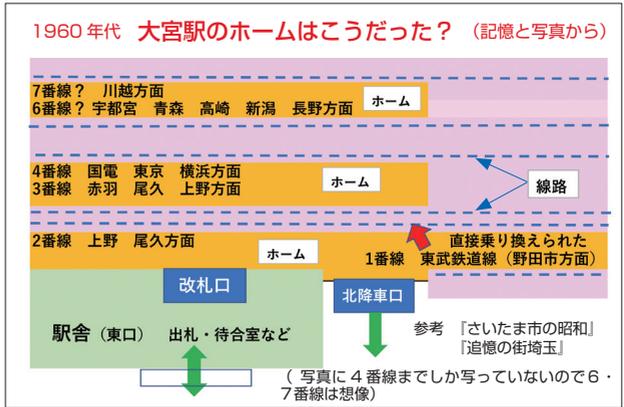
構内踏切の北大宮駅にしても、野田線とJRのホームが一緒の大宮駅にしても60年以上前のことです。記憶違いではないかと心配になり図書館で調べてみました。そして数冊の本に巡り合ったのです。『大宮駅100年史』によれば、



1967 (昭和 42) 年頃、東口駅舎が民衆駅 (国鉄と民間が共同で建設し、商業施設を設けた駅) として新しくなったり、赤羽—大宮間が3複線化になってホームが2面新設されたり、設備が新しくなったりと、駅構内が一変したとのこと。「これにともない、ホームの使用法が変更になり、東武線は分離扱いとなる」という記述がありました。つまり、もとは国鉄と一緒にだったということで、このときに野田線はホームも改札口も別々になったのです。3複線になる前、京浜東北線、東北本線、高崎線の列車は、3つのホームに入り乱れて発着していたということです。

『追憶の街埼玉』という写真集には、国鉄と東武鉄道のホームが一緒だった

ことがわかる写真が残されてきました。1955（昭和30）年の大宮駅東口改札が写った写真です。隅のほうに小さく写り込んでいる「のりば案内」には「①（番線）東武鉄道線（野田市方面）／②③ 赤羽尾久上野方面／④ 国電 東京横浜方面」と書かれていました。さらに改札口を入るとそこが2番線「尾久上野方面行」ホームということも、写真に写っている柱の表示からわかります。ですから1番線の野田線から直接、2番線の東京方面電車に乗り換えることは可能だったのです。



さらに改札口を入るとそこが2番線「尾久上野方面行」ホームということも、写真に写っている柱の表示からわかります。ですから1番線の野田線から直接、2番線の東京方面電車に乗り換えることは可能だったのです。

北大宮駅については『東武野田線 新京成電鉄;街と駅の1世紀』に1965（昭和40）年の平屋の駅舎の写真と「ホームには構内踏切で連絡」という文章が載っていました。野田線の大宮—北大宮間が複線化されたのが1968（昭和43）年ですから、この頃に駅やホームも大きく変わったのでしょう。

駅前の線路に沿った道を北に向かうと、左側に大宮駅を出て最初の踏切があり、ここまで並んで走っていた宇都宮線と野田線はこの先で分かれていきます。踏切の名前は野田線側が「第4号踏切」、宇都宮線側は「乗馬踏切」です。第4号というのは大宮駅から4番目の踏切ということです。今はこの踏切が1番目ですが、かつては大栄橋も、中山道のアンダーパスも踏切でしたし、裏参道の近くの焼き肉屋の先にも踏切がありました。乗馬踏切の由来は、昭和の初め頃、今のステラタウンの所にあった大宮競



東武とJRで別々に工事された踏切、道路にひかれた線の色も違う→

馬場へ行く馬が通ったからだとか。

乗馬踏切を渡って北へ10分くらい行くと、中山道から1本東へ入った細い道の端っこに「八百姫大明神」の小さな祠があります。この細い道は古中山道だという説もあり、1910（明治43）年と1914（大正3）年の『大宮案内』の中には「北原に在り、尼の八百年生きて人に昔話を伝えたものの住所の跡なり」と名勝・旧跡・遊覧地の1つとして紹介されています。郷土史研究家の間ではよく知られた神様です。お世話する人がいるのか、いつもお茶や花が手向けられています。母は八百姫様と呼んでいて、買い物帰りには必ず手を合わせていました。



八百姫大明神

八百姫様から東の方面へ向かうと「植竹遊歩道」があります。くねくね曲がりたいかにも暗渠あんきよという道で、今は道の両側ぎりぎりまで建物が建っていますが、1960年代初め頃には、ここに小さな川が流れ、両側に小さいながら田んぼがありました。今の風景からは田んぼがあったなんてとても信じられません。

この記憶にも自信がなかったので調べてみると、『大宮の郷土史 31号』に“遊歩道のあるところに流れていた川は水源が警察学校の中にあり、昭和20年代末頃までは川に沿って水田があった”という内容のことが書かれていました。そして“かつて植竹の辺りは北原という地名だったが、北原村の名主が「大宮暦」という暦の編製に関わっていたため、その田は暦新田と呼ばれた”という記録があるとのこと。併せて北原という地名の印刷された大宮の地図（昭和28年）も掲載されていました。私の記憶にあった小川と田んぼが本当に存在していて、田んぼはかつて暦新田と言われていたことがわかりました。



植竹遊歩道

気がいたら肉屋、八百屋、タバコ屋、銭湯、文房具屋、菓子屋、金物屋、荒物屋……、身の回りには必ずあった店がなくなっていました。いつなくなったのか思い出せず、一旦変わってしまうと前にそこが何だったのかも思い出せません。カラオケ喫茶、整体整骨院、ペット病院、コンビニ、塾などが増えていて、まさかの葬儀場もご近所にできました。時の流れをしみじみと感じたまち歩きでした。（記・イラスト 並木せつ子）



よみさんぽ編集委員のつばやき

遠くても近い存在

1年ほど前、大学時代の仲間たちとおよそ20年ぶりに再会した。横浜の中華街で中華料理を堪能し、紹興酒を飲み干し、ホテルに泊まって明け方まで語り明かした。再会を約束して別れ、その後、さまざまなことを我慢する日々が来るとは思っていなかった。

大学があるのは愛知県知多半島。当時、県外からの学生が約8割で、下宿生活を送る人も多く、再会した仲間も下宿生活の中で親交を深めた間柄だ。生活費が底をつけば手持ちの小銭をみんなで寄せ集めて食事を作り、お酒を飲んで夜に海に繰り出すなど、同じ時間をたくさん共有してきた。在学中の交際から結婚した人たちも何組かいて、夫婦の紆余曲折も周知の仲。卒業後は地元に戻り、今は暮らす地域も関西から東北までバラバラだ。

今年の再会は叶わなかったが、携帯のSNS上での交流が活発になった。グループトークの口火をきる人は決まって2人。1人は大学時代のニックネームが「おマメさん」。料理もDIYも完璧にこなすマメな人。もう1人はKawasakiのバイクをこよなく愛す気配りの人。昔からバイクの操縦技術には定評があった。「真冬の満月キレイだぞー」「最近見つけた昭和(感のあるお店)」。2人の呼びかけから何気ない日常が交換されていく。メッセージはほぼ写真つき。ウォーキング途中の夜の会津城、バイクで走る伊那谷、家族でおうちキャンプ、時には「寒波襲来でダイヤモンドダスト!」と動画も送られてくる。さながら定期に届くお便りのよう。その土地の風景やみんなの暮らしぶりが知れるのも嬉しい。時にはまじめに、仕事の悩みも相談し合う。

今はSNS上でのコミュニケーションはあたりまえ。それでも互いを知り尽くした4年間を共有する仲間とのSNS交流は、友人と会う機会が減った今のささやかな楽しみの1つ。再会できる日を待ちながら、遠い地にいても確かなつながりを感じる、そんなひとときを大切にしたい。(記 三石麻友美)

記憶と写真と絵と

書き出しは写真から

いつも書き出しを考える時は、写真を探すことから始めています。日常の雑感も、旅先での感動も、私の拙い文章力では伝えきれない自信がありませんが、たまたま撮っておいた写真が補ってくれます。仕事柄、建物や町並みを収めた写真は手元にたくさんありますが、せっかく文章に合った写真を見つけても、暗かったり、アングルが歪んでいたり、仕事向けのマニアックで細かな部分を写した写真だったり……せっかく分かりやすい写真が見つかって、記念写真のように家族が写っていて、挿絵に使えないようなものもあり、それが悩ましくもありました。

夕刻の建物見学

岐阜県の多治見は、タイル生産で有名な街です。そこに、モザイクタイルをテーマにした博物館があるので見学に行きました。訪れた時期が冬だったため、日没が早く、あたりは暗くなってきていました。市役所跡地に建設された博物館は、写真で見ていた採土場の山をそのまま建物にしたかのような形態からは想像できないほど、街中に建っていたのです。

街中に土の山を作るという意外性のある風景を作り出した時、建築家の心中は、さぞワクワクしたことでしょう。ただ、土という自然な素材を使っているせいか、決して異物感を感じません。そして、土から生まれたタイルという人工物は、やがて土に帰るというプロセスを示しているようで好感がもてます。

記憶の中の風景

夕刻から展示物を見始め、閉館時間まで楽しんでしまったので、博物館を出た時には夜になっていました。隣の市民体育館から部活に励む子どもたちの声が響く中で、建物の周りを何周も歩きながら見学してみました。

その時の印象を伝えられる写真はなかったので、絵に描いてみました。直接、その印象を伝えることはできないかもしれませんが、「訪問して実物を見たい」と思えるきっかけくらいになったらと思います。



(モザイクタイルミュージアム／設計：藤森照信)

とまつりしゅんいちろう
都祭俊一郎

1975年生まれ。生まれも育ちも、東京の下町。
エンジュの新築の他、保育園や幼稚園の設計（新築及び改修）
を複数行う。（写真 新 良太）





未来を拓く

つなぐ・つくるプロジェクト・5



旅するぞうさんとともに街を走る

出会いと・つながりを求めてキッチンカーを走らせます

2020年から「ファイザープログラム 心とからだのヘルスケアに関する市民活動・市民研究支援」の助成を受けて活動を始め、2年目に突入しました。プロジェクト名は「見沼の文化とSDGsを意識した共同創造のソーシャルファームづくり」。このプロジェクトのキーワードは「居場所」「仕事」「つながり」です。精神障害のある人たちの生活を支える活動を50年にわたって取り組んできたやどかりの里が、その経験を活かし、地域を巡回しながら、新たな出会いとつながりを求めてキッチンカーを走らせる取り組みを始めました。

旅するぞうさん、見沼を走る

2月26日、27日にかけて、2日間のプレ運行。最初に伺ったのは南中野の株式会社教育産業さん。OA機器やソフトなど、オフィスサポートのプロです。会社の駐車場をお借りし、キッチンカーと「旅するぞうさん」(写真)がお邪魔しました。たくさんの方の社員の方が来てくださり、しばしのコーヒードリンク。仕事を通じたやりとりはあったものの、改めてやどかりの里のことやプロジェクトを知っていただくきっかけとなりました。

続いて向かったのは、堀崎にあるNPO法人ユースサポートネット。地域で孤立





する子どもや若者のために、居場所づくりの活動をしている団体です。サッカー練習場と公園に囲まれ、地域の人が行き交う場所です。ここでもたくさんの方が集まり、「どうしてぞうさんがオレンジ色なの？」という子どもの声、「かわいい、癒しの絵です」というお母さん。お母さんが絵に見入ってる間に、子どもたちは鬼ごっこ。「次はいつ来るの？」とうれしい言葉もいただきました。お付き合いのある団体や企業のご協力のもと、幸先のいいスタートとなりました。

「旅するぞうさん」は、HAMUさんという狭山市在住の作家さんが描かれた絵です。この絵に惹かれて購入したオーナーさんが、たくさんの人に見て欲しいと、各地を旅するようになりました。2月の1か月間、見沼の街を軽トラックに乗ったぞうさんが走りました。見沼の後は川越の街を旅しているようです。ぞうさんの旅路をぜひ追いかけてみてください。詳しくは……

▶ [旅路！旅するゾウさんプロジェクト \(travelingelephant.net\)](http://travelingelephant.net)

コーヒーを飲みながらほっと一息

コロナ禍で在宅時間が増え、外出や外食の機会が減り、地域のお祭りや行事もすべて中止となってしまいました。去年の今頃は自粛生活とは言え、ウォーキングする人の姿が多く見られましたが、1年も経つと週末の住宅街は人の姿がなく、静まり返っています。

そんな中で突如現れたオレンジ色のぞうさん、インパクト大です。人寄せパングならぬ、人寄せぞうさん。ぞろぞろと人が集まり、ぞうさんといっしょに



写真を撮る人の姿，犬の散歩途中に足を止めて立ち寄ってくれる人の姿がありました。やどかりの里の活動拠点でもある中川では、「久しぶりに知り合いの顔を見られた」「いろいろな人とおしゃべりできて良かった」と、コロナ禍で人との交流を求めている人たちの久々の交流の場となりました。

注文を受けてから1杯ずつ丁寧に淹れてくれるコーヒーは，やどかりの里が運営する喫茶ルポーズ(大宮区天沼町)の提供。コーヒーを待つ間，キッチンカーのまわりでは，ソーシャルディスタンスをとりながら自然とおしゃべりが始まります。まさに移動するお茶の間です。

出張カフェが見沼の隅々を走る

やどかりの里では無肥料，無農薬の自然栽培にこだわり，人と人，人と自然が共に生きていく環境を大切にしたい農園の取り組みがあり，地域巡回の時には，やどかり農園で栽培したショウガと狭山茶をブレンドした「ジンジャー和紅茶」をふるまいました。ほんのりショウガの香りがあり，大人だけでなく子どもにも大好評。肌寒い日に外でいただく温かい飲み物は，気持ちをほっこりさせて





くれます。

今回は初の試みで、コーヒーとケーキ、和紅茶、やどかり農園のお野菜などを乗せて、ぞうさんといっしょに街なかを走りました。これから偶数月に地域巡回を計画して、出張カフェが見沼の隅々を走る予定です。どんなものをキッチンカーに乗せていこうか、どこにキッチンカーを走らせようか……手探りだらけのプロジェクトですが、新しい出会いやつながりを1つでも多くつくっていきたいと思っています。

「はじめまして」「また会いましたね」そんな言葉がたくさん行き交う場づくりを目指します。

今後の地域巡回の予定は、4月16日（金）・17日（土）・18日（日）の3日間。小雨決行です。あなたの住む地域に、キッチンカーが出向きます。

（記 大澤 美紀）

未来を拓く つなぐ・つくるプロジェクト2020

募集しています！

今後の巡回に協力していただければそうな場所の情報を求めています。アイデアや情報をお持ちの方がいらっしゃいましたら、ぜひ事務局までお声がけください。

■事務局

〒337-0026 さいたま市見沼区染谷1177-4 やどかり情報館内

TEL 070-3260-2020 / FAX 048-680-1894

E-mail : tt.prj2020 @ gmail.com

インフォメーション

人と人とのつながりで
安心安全な未来へ向けたまちづくりを

清掃スタッフ
募集中！！
QRコード
▲応募はこちら

M. 今日も 明日も そっと。
毎日興業株式会社

〒330-0842 埼玉県さいたま市大宮区浅間町2-244-1
TEL : 0120-156365 (フリーダイヤル) <https://www.mainichikogyo.co.jp>

芝川ヤギ部の応援グッズ

芝川ヤギ部は、ヤギをお世話することを通じて、人と人々が笑顔で交流をし、地域や社会がより良いものとなることを目的として発足しました。グッズの売上の一部と応援チケットの諸経費を抜いた収益は、ヤギさんのお薬や小屋の手入れなどに使わせていただきます。地域に癒やしを与えてくれるヤギ活動をぜひ応援ください！

芝川ヤギ部応援グッズ好評発売中！！
こちらから！→

こころの悩み、ちょっと話してみませんか？

お住いの区の障害者生活支援センターまでご連絡下さい。

見沼区障害者生活支援センターやどかり ☎電話 048-682-1101
大宮区障害者生活支援センターやどかり ☎電話 048-795-4720
浦和区障害者生活支援センターやどかり ☎電話 048-793-6373

***精神障害のある方、そのご家族の地域の相談機関です。**

片柳地区社会福祉協議会

つながりを大切に活動しています

048 (686) 8601

開設時間
月曜日～金曜日
10時から16時

「よみさんぼ」配布ボランティア募集

やどかりの里では、障害のある人で分担して、地域の皆さんによみさんぼをお届けしています。お散歩のついでなどに、ご近所に配ってくださるボランティアを募集しています。地域や部数はご相談させていただきます。

連絡先 048-680-1891 (やどかり情報館：萩崎まで)

パートさん大募集！

高齢者向け弁当の調理補助・配送のパートさんを募集しています。
軽自動車ですいたまま市内にお弁当をお届けしています。

週3～4日 / 11:00～17:00 / 時給960円
配達パート / 15:30～17:30 / 時給960円

【お問合わせ】TEL 686-7875 (月～金 8:30～17:30 受付・祝日を除く)

エンジュ 〒337-0042 さいたま市見沼区南中野 286-1
担当：永瀬

すべての人々が人間らしく豊かに育ちあえる地域づくりをすすめるために

こうぬまふくしかい

社会福祉法人 鴻沼福祉会

こころを込めた手づくりの品をぜひ一度お試しください



いちぶ
とうふ屋 一豆

TEL 048-854-8000

FAX 048-854-3538

さいたま市中央区上峰2-10-20

つばさ共同作業所とそめや共同作業所が手がける、国産・手づくりこだわった本格とうふ。宮城県産高級大豆「ミヤギシロメ」を100%使用し、オリジナル惣菜も人気です。大豆本来の濃厚な甘さとコクを味わえる“小さなぜいたく”を食卓にお届けします。

きりしきのパン

TEL 048-854-6910

FAX 048-854-6942

さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内

きりしき共同作業所のパンは食の安全・安心にこだわり、原材料に国産小麦粉を使用しています。(一部商品を除く)

職人とともに手がけるパンは、少し懐かしい味と香りがします。



弁当屋 いちぶ

TEL・FAX 048-684-1257 さいたま市見沼区染谷2-145

そめや共同作業所のお弁当は旬を感じる手づくり弁当です。

野菜をたくさん取り入れ、手が込んでいると女性に大人気です。

鴻沼福祉会から読者の皆様へ

○鴻沼福祉会では、袋詰め・部品組み立て作業や清掃作業、資源回収など、地域の企業様のニーズに応えるべく様々な仕事を受注しています。働くことをとおして障害のある人がさらに輝けるチャンスを探求して新しい仕事にもチャレンジしつづけています。

○障害のある人たちの就労支援、生活支援、相談支援のスタッフを募集しています！ 問い合わせ先：048-854-6890 (担当オガワ)

鴻沼福祉会事業所一覧

●本部・事務局 埼玉県さいたま市中央区円阿弥1-3-15 鴻沼福祉会館内 TEL：048-854-6890 FAX：048-856-0313

《はたらく》●つばさ共同作業所(中央区) ●あざみ共同作業所(見沼区) ●そめや共同作業所(見沼区) ●きりしき共同作業所(中央区)

《くらす》●第1たかさご荘 ●第2たかさご荘 ●第3たかさご荘 ●かえでホーム ●かりんホーム ●よつばハイツ

●なつめホーム(以上、中央区) ●のぞみホーム(見沼区) ●ひかりホーム(西区)

《ささえあう》●中央区障害者生活支援センター来夢 ●地域活動支援センター来夢(以上、中央区)

●見沼区障害者生活支援センター来人(見沼区)

さいたま見沼よみさんぽ

作者紹介

記録写真家 柿内未央さん(表紙写真)

“人としていかに生きるか”について考えるなかで、平和の基盤は自然との共生にあると痛感し、埼玉県の明石農園にて自然栽培を学ぶ。

生かされていること、全ての本質が等しくつながり合っていることを感受してから世界が変わり、その一部として生きたいと思うように。

自然とヒト・人と人をむすぶお手伝いがしたく、“自然とヒト”…いのちの記録をメインに活動している。

ホームページ <http://tomomusubi.com/>

表紙写真によせて

桜の咲く頃になると
お花見の由来を思い返します。

“サクラ”の語源の一説。
“サ”は田の神様のことを表し、
“クラ”は神様の座る場所という意味があり、“サクラ”は田の神様が山から降りてくるときに留まる依代を表すとされている。

また、桜の花を稲の花に見立て
その年の収穫を占っていたこともあり、
“サクラ”の代表として桜の木が当てられるようになったのだそう。

豊作を願って、
桜のもとで田の神様を迎え、
料理やお酒でもてなし、
人も一緒にいただくことが本来のお花見の意味。

自然を敬い、
生かされていること……
つながりを感じながら
共に生きていこうとする姿。

先人たちのように
感謝の気持ちをもって
日々を過ごしていけますように。

(柿内未央)

さいたま見沼よみさんぽ 第37号

発行 2021年4月

編集 「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員会
〒337-0026 さいたま市見沼区染谷
1177-4

Tel 048-680-1891 Fax 048-680-1894

E-Mail johokan@yadokarinosato.org

<https://www.yadokarinosato.org/>

発行 公益社団法人やどかりの里

理事長 増田一世

印刷所 やどかり印刷

- * 「ヤギ日誌」のコーナーはお休みです。次号、リニューアルしてお届けします。
- * 「よみさんぽ」配布のボランティアを募集したところ、たくさんの方からご連絡をいただきました。この場を借りて御礼申し上げます。

公益社団法人やどかりの里は、この大宮見沼界隈で障害のある人たちとともに地域で生きることを目指して活動を続けています。私たちは長年この地域で活動し、地域の皆さんに支えていただきました。

そして、この地域の人々が織りなしてきた歴史・文化、守り育ててきた自然、地域に根づいた事業等々をもっと知りたいたいと思うようになりました。合わせて、やどかりの里のことも皆さんにもっともっと知っていただきたいと「大宮見沼よみさんぽ」を創刊いたしました。またこの度、広く地域情報をお届けするため「さいたま見沼よみさんぽ」と改題致しました。

「さいたま見沼よみさんぽ」編集委員一同